

第1回 サーフィンサイエンス&テクノロジーシンポジウム 開催案内

第1回サーフィンサイエンス&テクノロジーシンポジウム事務局

サーフは1960年代頃から急速にその人口が増え始め、現在では我が国に200万人(50人に1人)もの愛好家があります。人口の増加だけでなく、サーフテクニックやサーフボード、ウェットスーツなど、様々なものが急速に変化してきました。このような進化の過程では、様々な科学やテクノロジーの進化が含まれていたに違いありません。その中には海洋学や海岸工学で扱われる波の変形や波の予測といったものもありますし、造船学から発展したボードの進化もあります。

たとえば近代サーフボード・デザインの父^{※1}と言われるBob Simonsは、1940年代、造船学からPlaning Hullの理論^{※2}をサーフボードに取り込み、波浪予測技術(SMB法)を開発した研究者の一人であるScrippsのMunk教授から波の予測技術を学んでいました^{※3}。

今回のシンポジウムの一つのテーマは、このようなサーフィンと様々な科学や工学、技術との結びつきを確認し、その結びつきを深める場を創ることです。

本シンポジウムのもう一つのテーマは、サーフィンをとりまく環境です。我が国ではサーフィンの進化と同時に、海や海岸を居住や経済活動の場として利用することも進んできました。その過程で、一方では親しみやすい海や海岸をつくと同時に、一方では多くの美しい砂浜やサーフゾーンが失われ、最近では、人口構造物の投入やダム建設などにより、自然の砂の動きを妨げ、その結果砂の侵食が進み、サーフはもちろん、逆に人が近づけないような危険な場所になってしまっている場合もあります。さらに、場所によっては水質汚染や生態系への影響などの問題が起き、数年前に比べて大きく変化している場所もあります。このような現状を解決する上で、科学や工学、技術とサーフィンとの関わりは今後益々増えてくるものと考えられます。

さらに、最近では、サーフは若者だけのスポーツではなく、中高年のスポーツともなり、生涯を通じたスポーツとなってきました。体育学や教育学との結びつきも本シンポジウムのテーマの一つです。

このように欲張ったシンポジウムではありますが、サーフィンサイエンス&テクノロジーという新たな学問を創造する一つの足がかりとなることを期待しています。

※1 “The Father of Modern Surfboard Design: Bob Simons”, ジョン・エルウェル, サーフ 60s スタイル, NALU

※2 Naval Architecture of Planing Hulls(1946), Lindsay Lord 著

※3 Munk教授はSimonsの大学のクラスメート。SMB法はノルマンディー上陸作戦を成功させた波浪予測から発展した波浪推算法であり、海岸工学では最も有名な技術の一つである。